

大石学著「江戸の教育力—近代日本の知的基盤—」東京学芸大学出版会2007年3月30日刊を読む

## 「江戸の教育力」を見出す意義

### 1. 「江戸の教育力」が支えた明治以後の近代化

「江戸の教育力」の発達について、三つの時期に大別して見てきた。

#### (1) 「江戸前期」

「平和」と「文明化」の到来のもと、文字社会が成立し、学問や教育への社会的関心が高まった。

#### (2) 「江戸中期」

将軍吉宗が主導した享保改革は、「大きな政府」「強い政府」により国家機能・公共機能を拡大する方向で進められた。このうち教育改革は、武士のみならず庶民も対象とする国民教育政策として展開され、国家秩序・社会秩序の安定化、「平和」と「文明化」の推進に寄与した。

#### (3) 「江戸後期」

全国各地に、藩校・郷学・手習所(寺子屋)などが、地域や身分を越えて国家規模で展開し、国民文化が開花した。これは日本を訪れた多くの外国人を驚かすに十分な規模と水準であり、「江戸の教育力」の到達点を示すものであった。

2. (1)近世300年は、国家としてのまとまりが強化され、「平和」のもとで社会の「文明化」がおおいに進んだ時代であった。これは、明治以後に展開する「西洋型近代化」の前提となる、「日本型近代化」ともいえる過程であった。

(2)そして、この過程を基礎から支えたのが、「江戸の教育力」であった。江戸の教育は、地域や身分を越えて国家規模で普及・発達していった。江戸時代は、武士のみならず庶民が教育の対象となり、さらに庶民自身が主体的に学ぶ姿勢を獲得した点において、国民教育の形成期であった。

(3)明治維新において、新政府が地域差・身分差を否定する廃藩置県や身分制廃止などの諸政策を打ち出したさい、大きな混乱や抵抗なしにこれらが実現した前提の一つに、「江戸の教育力」があったといえる。明治政府の統一的な教育制度は、決して「江戸の教育力」を否定して始められたものではなく、むしろこの延長上に達成された。「江戸の教育力」は、まさに近代日本の知的基盤を形成したのである。

### 3. 現代の課題への射程

(1)①さて、今日政治課題とされる規制緩和、地方分権、首都機能移転など構造改革の諸問題は、江戸時代以来長い時間をかけて成立し展開してきた日本型社会・日本型システム、すなわち均質的・画一的な社会を、世界化の中で、いかなる方向に改変するのか、という文脈でとらえられるべきものである。

②すなわち、江戸時代の見直しとは、断絶した遠い過去を振り返ることや、古き時代を懐かしむことではなく、現在変革の対象とされている諸要素を生み出した「地続きの時代」の考察なのである。

- ③自由化・個性化をめざす教育改革も、日本型社会・日本型システムの改編の一環としてとらえられる。均質化・画一化(=同質性・普遍性の獲得)という江戸時代以来の達成を尊重しつつ、いかに「教育格差」を発生させることなく、自由化・個性化(=異質性・個別性)を実現するのか、教育改革は、こうした視点から改めて議論されなければならない。
- (2)①たとえば、近年の教育政策は、「学校嫌い」や「学校離れ」といった問題に対して、「ゆとり」や「週休二日制」など、児童・生徒の負担を軽減する方向で対応してきた。しかし、この方向をおしすすめることが教育改革になるのであろうか。
- ②教育の役割に、個人の成長、社会の発展へ向けての知識・技術の伝達があり、このために学校生活において授業が相応の時間を占めることを考えると、今日の教育改革は、負担の軽減よりも、むしろ教育の改革、教材(カリキュラム)の改革を重視すべきであるように思われる。
- ③義務教育でない江戸時代の就学率・識字率の高さは、庶民の教育・学習への高い関心や強い意志にもとづくものであった。現代においても、社会が、保護者が、さらには児童・生徒自身が教育の意識を認識し、学習の楽しさを理解できるよう環境を整備する必要がある。今日の教育改革の本質はここに求められるべきと考える。
- (3)①また、「平和」「文明化」と「教育力」の相互関係も、現代的視点からとらえ直さなければならない。今日「世界化」の中で、各国・各地域が、さまざまな格差を縮小しつつ、それぞれの個性を発揮すること、すなわち同質性(普遍性)と異質性(個別性)の共存は、人類史的な課題となっている。こうした理念を実現するのは、武力ではなく、「平和」「文明化」をさらにおしすすめる意志と知恵であろう。
- ②暴力や格差をとまなわない、「真の世界化」を実現するためには、世界規模で武器を管理するシステムや、人命・自然を尊重する意識が形成、共有されなければならない。こうしたシステムの開発や、意識の形成を基礎から支えるのは、世界規模での「教育力」なのである。
- ③「江戸の教育力」の多様な実態と発展の考察は、日本の将来のみならず、世界の将来を構想する起点としての意義をもつ。

P114～117

#### <コメント>

意外や意外、江戸時代は武士も農民も町人も、上下の別なく教育熱が高かった。武士の子弟が通う藩校は全国で300近く、庶民の手習所(寺子屋)は何と7万とも。当時の外国人も驚いたその教育の広まりは、実は、明治以降の学校制度の導入のみならず、日本の急速な近代化を支えたものでもありました。東京学芸大学の太田先生の本著は、江戸時代を「初期近代」ととらえる新たな見方を示します。学習塾・予備校・学校の先生方の原点、アイデンティティを示す必読書。是非、ご一読を。

2019年4月12日(金)林明夫